

論文の内容の要旨

コンポラ写真：日本写真史における「日常」、1970 年前後を中心に

富山由紀子

1960 年代から 70 年代にかけて、日本の写真界には「コンポラ写真」と名付けられた表現の流行が起きた。本論文は、これまで具体的に議論されることの少なかったこの潮流について、その誕生の背景から流行化の経緯、流行が収束した後の動向までを包括的に検証したものである。

「コンポラ写真」（以下、コンポラ）という名称は「コンテンポラリーな写真」を略したもので、60 年代半ば頃に顕在化し始めたこの表現傾向が、アメリカで 1966 年に開催された写真展「Contemporary Photographers」の出品作品に似ていたことから生まれた。コンポラが注目を集める契機となったのは、アマチュア向けのカメラ雑誌『カメラ毎日』が 1968 年に組んだ特集「日常の情景」での紹介である。この特集で写真家の大辻清司が整理した、誇張や強調を避け、何気ない日常を極めてそっけなく写しとるというコンポラの特徴が、その後の議論における共有基盤となった。

コンポラの流行は 70 年代半ばに収束し始め、複数の方向に影響を分散させていった。80 年代に入ると徐々に回顧と再評価の言説が現れるが、個々の作品の具体的な検証や、潮流の全体像に対する詳細な検討はなかなか進まず、流行化のなかで現れた多様な事例を削ぎ落とし、単純化して論じようとする傾向も見られた。

本論はこれに対し、潮流が本来もっていた複雑さを取り戻し、その輪郭の曖昧さにこそコンポラの登場した意味と時代性を見いだすべきであると考えた。また、コンポラと見なされた作品や、それに関連する言説の具体的な検証を通して、写真表現を取り巻くメディア状況の変容をジャンル横断的に追うことも狙いとした。

第一章ではまず、コンポラという言葉が登場し、流行化していくまでの言説の流れを確認した。

流行化の契機となった「日常の情景」特集は、大辻の寄稿以外にも複数の記事を擁し、新しい潮流を定義づけて囲い込むのではなく、さまざまな可能性に開こうとするものであった。その後の議論はこの特集の方向性を引き継ぐかのように多様化していくが、そこには流行の主舞台となった媒体であるカメラ雑誌が内在化させてきた慣習や、60年代以降に起きたその揺らぎが関連している。

コンポラに対する同時代的な評価には、報道や広告といった既存の表現に対するアンチテーゼ性を認めるものがある一方で、社会的な問題から目をそらし、内向する表現であるとの批判や、形式を真似るフォロワーへの批判も多かった。しかし、実際にコンポラと見なされた作品を分析して見えてくるのは、それらがさまざまな情報と相互的な関係性を持ちながら、この時代の「日常性」をいかにとらえるかに取り組み、あえて分かりづらいかたちで時事的な問題や歴史への批判的な言及を試みていたということである。

「日常性」というキーワードに加えて、コンポラと見なされた作品が扱うテーマには、大きく分けて「アメリカ」と「地域」に関するものが多い。そこで、第二章では「アメリカ」に関する作品を、第三章では「地域」に関する作品を具体的に分析し、コンポラのもつ批判性を論じた。

第二章で重点的に取り上げた下津隆之は、コンポラの流行初期からその重要な担い手とされた新鋭の写真家であり、1967年の作品「沖縄島」で注目を集め、新しい表現の登場を印象づけた。60年代後半という激動の沖縄を舞台にしながら、対象から距離をとる「引き」の姿勢で撮影及びレイアウトされたこの作品は、じつは琉米および本土をめぐる複雑な関係性に、歴史文化や経済といった複数の角度からアプローチしたものであり、カメラ雑誌の中央視点という、写真表現の場における日常性を批判するものでもあった。また、これに続けて発表された二作品は、太平洋戦争からベトナム戦争へと続く、「戦時下」の様相への言及を隠しもっている。

なお、「アメリカ」に関するコンポラには、日本国内や復帰前後の沖縄を舞台とした作品に加えて、実際にアメリカに渡って撮影された作品も見られ、それらをめぐる言説には、アメリカと日本を同一視しようとする欲望が内包されている。コンポラにおける「アメリカ」は、影響関係の論じられたロバート・フランクや「Contemporary Photographers」展との布置に加えて、戦前から続く日本における対米意識の歴史を多層的に示すものでもあるのだ。

第三章では、旅行者の視点を通して日本各地の日常的光景を写しとった秋山亮二の作品「旅ゆけば……春」と、地元からの視点で観光地を見つめた森裕貴の「京都」シリーズを主に取り上げ、アマチュア写真とコンポラの関係などもふまえながら、「地域」をめぐるコンポラの多様性を考察した。秋山の作品は、飄々としたユーモアを交えて国土発展の経緯と現状を描きだしたものであり、「観光客としての写真家」というタブー視されてきた立場をあえて実践することで、写真表現の世界にひそむ日常性を破ろうとするものであった。一方、森の作品は生まれ育った土地にまつわる個人的な記憶や思索をおりまぜて京都の日常を提示することで、固定化された「地域」のイメージを裏切り、内閉的で私的であると批判されたコンポラが、むしろ積極的に「私性」を利用することで既存のイメージに揺さぶりをかけていたことを明らかにしている。

続く第四章では、前章までの分析をふまえた上で、それ以外のコンポラの事例を挙げ、この潮

流の射程の広がりや境界線の曖昧さを論じた。コンボラが流行化すると、「引き」の姿勢とは異なる明らかな誇張を用いた作品や、テレビ番組での展開など、大辻が整理したコンボラの特徴からは逸脱するような表現もコンボラと見なされていった。これは、コンボラがその根底に「日常性」への批判的な態度を有していると認識されていたためであると考えられる。

また、コンボラはその潮流としての輪郭の不定形さや、中心的なイデオログの不在によって、写真史上のなにを「源流」とするのかについての議論を引き起こしたが、その際に鍵となったのも「日常性」であった。「日常性」を扱った写真はコンボラの登場する前から存在していたことから、国内外のさまざまな写真がコンボラの源流として論じられたのである。たとえば木村伊兵衛とコンボラと結びつける言説は、複数の時代に潜在するものとしてのコンボラという視点を提起し、木村の作品に対しても新たな読みの契機を生む反面、戦時下の写真に内包されていた問題を見過ごさせ、「日常性」における時代差を無視したところから写真史を再編成しようとする欲望を呼び寄せることにもなった。

一方、コンボラにおける「日常性」の重要性は、被写体としての日常だけでなく、写真というメディア自体の日常性にも関係している。たとえば、コンボラと見なされた作品が多用した記念写真風のスタイルは、一般に流通するものとしての写真を想起させ、表現技術の高さや社会的な使命感を重視する既存の写真家像を積極的に裏切り、「作者」のあり方を揺さぶるものであった。こうした「作者」の位相の変化については、文学作品の分析を通して検証し、その同時代性を論じた。

第五章では、コンボラの流行が退潮し、その影響が拡散していく様子を明らかにした。考察の対象としたのは、コンボラ以後の表現の変容を受けとめる場となった、『カメラ毎日』が新たに誌面に設けた「アルバム」欄と、「自主メディア」の動きである。プロ・アマ関係なく参加することのできる公募欄として創設され、コンボラの撮り手やフォロワーの受け皿の一つとなった「アルバム」は、「時代の声」を収集することで既存の「作者」のあり方を乗り越えようとするものであったが、掲載される作品はコンボラに見られた批判性を次第に薄めていき、ストレートな自己肯定へのこだわりや、80年代的な軽味に接近していった。

「自主メディア」とは、写真家たちが自主的に運営するギャラリーや印刷物のことを指す。70年代半ばから数を増やし、国内各地で人びとの交流を生んだこの流れのなかにも、コンボラは批判的に内在化されていった。たとえば「コンセプト・フォト」と呼ばれる写真群は、コンボラが持っていた日常への批判性を、より根源的な、「見ること」をめぐる制度への批判というかたちで継承していく。また、こうしたオルタナティブな活動が、カメラ雑誌などの中央のメディアや企業との関係を持ちながら展開されたことで、既存のシステムに内側からの動揺が起きたとも言える。

第六章ではコンボラの回顧と再評価が行われていく過程を考察し、コンボラをめぐるさらなる議論の可能性を論じた。コンボラを過去の現象として扱う言説は、美術館での展示や通史的に写真史を扱う書籍、写真を専門としない雑誌などを通して展開されたが、コンボラに内包されていた批判性の検証はなかなか進展しなかった。早逝した牛腸茂雄をめぐる議論がコンボラへの

再注目をうながす契機の一つとなったが、牛腸の写真集『SELF AND OTHERS』（1977 年）をコンポラの最たる成果として重視する議論は、彼の作品が有していた時事的な問題への言及を看過するものでもあった。

しかし、2000 年代に入るとコンポラをめぐる言及はようやく多様化を見せはじめ、写真というメディアの置かれた状況の変容を重視する議論や、90 年代以降の写真をコンポラの再来とする見方などが登場する。かつてはその「源流」を議論されたコンポラが、今度はその後の写真の「源流」と見なされる時代に入ったのである。

こうした経緯の整理に加えて、本論では最後に、関口正夫のようにコンポラのスタイルを維持し続けることでこそ表現しうる社会の変化について考察し、さらに、コンポラの「引き」の態度が今後の写真表現において示しうる有効性についても論じた。